

韓国留鳥コウノトリ (*ciconia boyciana*) の過去、現在、そして未来

ハ・ドンス(韓国教員大学 コウノトリ生態研究院 hds3071@knue.ac.kr),
Dongo-soo Ha(Eco-institute for Oriental Stork,
Korea National University of Education)

コウノトリ (*Ciconia boyciana*) はコウノトリ目 コウノトリ科の鳥類で、1900年代初期までは極東アジア地域に比較的多く棲息していた。ところが様ざまな要因により個体数がかなり減り、現在は中国とロシアの境界であるアムール川(Amur River)とウスリー川(Ussuri River)、ロシアのゼヤ川(Zeya River)流域、中国東北部のサンジャン(三江)平原(Sanjiang Plain)などを中心に3,000余個体だけが棲息していると知られている。

過去の文献によると1800年代には国内ではありふれた鳥としてコウノトリを観察することができたし、コウノトリが人を怖がらず田んぼに近づき、簡単に狩ることができたという。韓国では特にファンヘ(黄海)道地域で地域的にありふれた留鳥であり、韓国でよく知られた鳥類で幸運をもたらす鳥だと記録されている。

朝鮮半島地域でありふれた鳥として観察されたコウノトリは、朝鮮戦争(1950~1953)を経ながら巣をつくる樹高が高い木がなくなり、密猟、棲息地の汚染などにより、その個体数を急激に減らした。

朝鮮戦争、密猟、棲息地汚染などで個体数が急激に減って1960年代以降繁殖個体が確認できなくなったが、1971年4月1日に忠清北道ウムソン(陰城)郡セングク(筌極)面クァンソン(館成)里にて観察された記録がある。忠清北道ウムソン郡セングク面クァンソン里にて観察されたコウノトリは発見後3日ぶりにオスが密猟者によって殺害され、1994年に残ったメスのコウノトリも死亡して国内のコウノトリ繁殖群は絶滅した。

国内で絶滅した個体群を復元するために韓国教員大学・コウノトリ生態研究所は、1996年にロシアとドイツから3個体のコウノトリを再導入したし、これをはじめとして2007年までにドイツ、ロシア、日本から総36個体と2個の卵を再導入した。再導入したコウノトリは2002年から繁殖に成功し、2008年以降は毎年10羽以上増殖した。

2014年6月にイエサン(禮山)コウノトリ公園が設立され、コウノトリ60羽をイエサンコウノトリ公園に送ったし、2015年9月3日にイエサンでコウノトリ8羽を放鳥してから2024年までに128羽のコウノトリを放鳥した。野生では2016年に2羽が野生繁殖によって生まれたあと、2024年までに217羽のコウノトリが野生で生まれた。野生繁殖ペアの場合、2016年に1ペアからはじまり2024年には21ペアに増えた。

大韓民国の留鳥コウノトリ事業を通じてコウノトリは、これまでの状況を見ると成功的に自然に定着しているようだ。しかし現在野生で定着している個体たちが、かれらの営みを続けていくには解決していかなくてはいけない問題がある。

解決しなくしてはいけない一つ目の問題は棲息地の問題だ。韓国の野生で生きているコウノトリたちの位置情報を分析した結果、約70%は農業地域に留まっていることを確認することができた。すなわち、農耕地の面積及び安全性がコウノトリの生存に至大な影響を及ぼすということだ。よって農耕地が減らず、田んぼの生物多様性が高いほどコウノトリがより生きていくのに有利だということがわかる。これに伴い、コウノトリが生きていく地域に農業を持続させていく様ざまな装置が必要だ。

解決しなくしてはいけない二つ目の問題は安全に巣をかける場所、またはタワーの問題だ。コウノトリたちの繁殖の特徴は高い構造物を好み、作りあげる巣もまた大きくて重い。コウノトリが繁殖するときの部

分の重さ及びヒナの重さや巣の重さなどをすべて合わせると、だいたい70～80 kg程度の重さを支えられなければならない。一般の木がこの程度の重さを支えるには木が大きくなってはいけませんが、そのような木は韓国にはほとんどない。それに伴いコウノトリが巣を安全にかけるためにイエサン郡では、人工巣塔を設置して繁殖を誘導した。巣塔がない地域では送電塔とか電柱に巣をつくるが、電柱の場合は感電及び電線に衝突するような問題が発生し、また送電塔の場合には感電はないが電気事故を誘発する問題が発生する。これに伴い大韓民国全域にコウノトリが安全に巣をかけられる装置を設置したり、送電塔のような構造物の安全性を高めたりする方法を苦心しなくてはならない。

解決しなくてはならない三つ目の問題はコウノトリに対する認識の変化だ。この部分の一つ目の問題と二つ目の問題共に該当する部分でもある。コウノトリが増えるにつれて大韓民国ではコウノトリという新しい鳥類が暮らすようになった。これは現在まで接してこなかった新しい種との接触であり、このような接触は当然だが若干の不便と資源が消耗される。このような点でこのような不便と資源の消耗に対する国民または機関の合議及び受容が必要だ。コウノトリと共に暮らす方法について学ばなくてはならないし、我々の周辺にコウノトリが暮らしていくということを認識しなくてはならない。このような点が、今後のコウノトリの事業において解決しなくてはならない問題だ。

解決しなくてはならない四つ目の問題は近親ペアの形成だ。野生復帰個体の致命的な短点は親個体の数が限定的であり、子ども個体たちが近親ペアを形成して繁殖をする確率が高いということだ。この問題は子ども世代に行くほど致命的になってくる問題だ。この問題を解決するために日本の飼育コウノトリと国内の飼育コウノトリの交流が至急必要であり、外部個体の導入ルートの多様化がやはり必要だ。

2023年、国際自然保護連合(IUCN)の種保全計画樹立ワークショップ(PUVA)にて、50年後のコウノトリビジョンを樹立させた。ビジョンはつぎのようなものだ。「2053年にコウノトリ野生復帰が成功的に成し遂げられ、遺伝的多様性を維持する個体群が500個体、1000個体と自らの力で維持されている。IUCN韓国レッドデータブック絶滅危惧種の等級は解除または下方調整された。個体群の復元が成功的に成し遂げられ、持続可能な棲息地管理のための専担機構が活動している。2053年コウノトリが利用可能な健全な棲息地が韓国全域に拡大及び維持されていて、これによってコウノトリの分布が島しょ地域を含む韓国全域に広がった。特に韓国全域に環境に優しい農業の比率が拡大され国民の健全な食生活にて大きな前進が成し遂げられた。それぞれの地域ごとにコウノトリが安定的に繁殖できる与件が拡大された。環境に優しい農業と生物多様性の増進の象徴としてのコウノトリに対する大衆の認識が拡大されて、大韓民国を象徴する鳥として認められた。海外においても成功的な野生動物の導入例として有名になり、国際的なエコツアーの象徴となった。コウノトリの野生復帰関連の国際協力が成功的に成し遂げられて、東アジアのコウノトリ生態系軸の復元に寄与している」